

「18歳、最後の二等兵」

戦争体験のお話 寺尾浩次さん

50年前から西和泉に住んでいます寺尾です。きょうのチラシを見ますと18歳までの日本と中国をうろちよろした複雑な経歴がたった6行で書いてあり、これは上手だと感心しています。しかし、租界とかの分かりにくい言葉もあります。戦争体験というより戦地にいた前後の経験をお話したいと思います。

上海租界とかは映画にも出てきますので、租界という言葉はご存知かと思いますが、天津の租界は日清戦争で弱体化した清国から天津市の一部の土地を強制的に借りまして、工兵隊が沼地を埋め立て、日本軍も警察も神社、役所、学校もあり、宮島街等の日本名の付いた街路があり、そこだけ植民地の町です。私はそこで生まれました。日本人だけの小学校に通い卒業しました。内地と全く同じ教育を受けました。教育勅語を中心とした道徳教育でいざという時は、国体護持つまり「天皇のために命を捧げる覚悟でいなさい」という言葉があります。天皇は神様で古事記や日本書紀は歴史として教えられ、全く疑問を持ちませんでした。親、先生、全ての大人から“真実”を教えられることはありませんでした。



天津が何十日間という長期間、水が引かない水害にあったのをきっかけに、中国の人とともに農作物を中心とした貿易商を営んでいた父を天津に残して、一家5人は大阪に転居しました。私は旧制中学の5年間、軍国少年としての教育を受け、1944年4月、兵器を作る技術者になろうという愛国心に燃えて北京工業専門学校機械科に入学しました。内地と同様、学期のほとんどは山海関、青島（ちんたお）などの軍需工場での勤労働員でした。絶えず空腹をかかえ、上級生による暴力、軍隊式のパワハラも受けました。

そうこうするうち、1945年4月に北支那方面軍司令官から召集令状を受け、敗戦までの5ヶ月間、北京南苑陸軍飛行場大隊に18歳で入隊させられました。軍隊生活は教育勅語に加えて「上官の命令は、天皇陛下の命令である」という軍人勅諭が加わり、さらに「捕虜になることを許さない」戦陣訓がかぶさってきました。残酷な戦いにも尻込みさせないために、天皇の名を付けた上意下達教育を強力に受けました。例えば便所に行く時は牢名主のような古参兵に「寺尾二等兵、便所に行って参ります」「寺尾、聞こえないぞ！」「はい、寺尾二等兵、便所に行って参ります！」。非常に検査の多い生活で、その中で一人でも兵器を汚した兵士がいますと、直立不動で「恐れおおくも天皇陛下からいただいた兵器を粗末にするとは何事だ！」と怒鳴りつけられまして、連帯責任ということで「対面ビンタ」です。対面というのは二人で向き合ってたたき合うことです。「整列！前列、回れ右。対面ビンタはじめ！」。手加減していると、班長殿の何倍もの強い鉄拳がとんできます。だから、最初から思いっきりやらなくてはなりません。やめ！と言われるまで果て

しなくたたき合いをしています。根性のある人間に育て上げるという訳です。部活で絶対服従を強要されているようですが、このような軍隊の行為が今も温存されているのではと心配になります。

実際の戦力はボロボロでした。飛行場には軍用機は1機も無く、木材で疑似飛行機を作っていましたが、毎日飛んでくるアメリカの偵察機はニセモノと見破って、1発も撃たずに無視して飛び去っていく状況でした。飛行場の周りに小さな櫓、監視塔がありますが、深夜に焼き打ちに遭いました。非常呼集が掛りますが、未熟な私たち初年兵と壮健とは言えない老年兵ばかりでは出動に時間が掛り、武装して現地に着いた時には、敵は影も形もありません。隊長はもういいと、部落に入って敵を徹底的に探す命令はしませんでした。そのため、私は一人の中国人も殺さず、自分も死なないで引き揚げてくることができました。

北京の飛行場はたまたま特攻機の中継地になっていました。九州とか京城（ソウル）から北京で1泊して、南京・上海に集結してゆきました。おそらく沖縄戦に参加したものと思われます。米機の来なくなった夕方に飛んできます。それを初年兵たちが農家に隠す。早朝になって搭乗兵は私たちが2列に並んだ真中を通して搭乗機に乗り込み、飛んでいきました。ほとんどが私よりも年下の紅顔の少年です。当初、戦闘機であった搭乗機は練習機となり、それも無くなると民間の旅客機となります。アメリカの軍艦に激突する前に撃ち落とされることは分かっています。それでも、飛ばしたのです。人名軽視の極致です。

毎朝、北京市場に向かう中国の農民が天秤にスイカを山盛りにして担いできます。監視塔にニコニコしながら近づいてきて、そのスイカを班長の前にポンと一つ置いていきます。私は友好的な行動と何の疑問も持ちませんでした。後で分かったことですが略奪と言っても良いことでした。三光作戦*¹とよばれるすさまじい作戦が行われていたのですが、戦時中は知らされることはなく、戦後何年も経ってから勉強をして分かったことです。北京近くで行なわれたことはあまり知られていません。中国の農民の抗日傾向は強まり、夜になると中国軍が跋扈するようになりました。そこで、北支那方面軍は1943年、無人作戦として万里の長城沿いの幅4km、長さ100kmに渡って全住民を退去させ、無人区とし、八路軍の影響をゼロにしようと実行しました。ある県の例を見ますと6,030戸、31,000人の村人が荒野に追いやりられ、抵抗した者1,200人を殺害し、文字通り三光作戦を実施しました。その中に、先ほどお話したスイカを置いて行った農民の身内がいたに違いありません。

私の小学校の親友の一人は、入隊後、満州に移動して、関東軍が敗走する時に病身だったため青酸カリを飲まされて自決させられました。友人の長兄は沖縄で戦死しました。優しかった従兄はガダルカナルで戦闘ではなく、餓死しました。私自身はわずか5カ月の軍隊生活でしたが、被害と加害、ともに心に深くかみしめてできることをと思っています。1952年、教職について以来、生徒に言い続けたことは、「色々な情報を鵜呑みにしないこと、真実は何であるか見抜ける人間になりなさい」ということです。

最後に中国語で一言。

シェシェ（謝謝）。ツアイ・チェン（再見）。

* 三光作戦：殺光（殺し尽くし）、焼光（焼き尽くし）、搶光（奪い尽くし）。日本軍が強行した燼滅作戦に中国側が付けた呼称。